
優しい賢者

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい賢者

【Nコード】

N8771H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

その姿形からとても恐がられている動物園のゴリラ。しかし自分達のところに落ちてしまった人間の子供に対して。実はゴリラは完全なベジタリアンでも大人しくて優しい生き物なのです。

第一章

優しい賢者

それは動物園にいた。そしてとても怖い顔をしていた。

「ねえお母さんあれって」

「あれはゴリラよ」

母親らしき若い女がまだ幼い男の子に話をしていた。

「あれがね。ゴリラっていうのよ」

「ゴリラ？」

「ほら、図鑑に載ってたでしょ」

そのゴリラは檻ではなく放飼式の舎にいる。彼等はそこをうろつくと歩き回りそのうえで餌として置かれているセロリや果物を手に取りむしゃむしゃと食べているのだった。

「あれよ。あれなのよ」

「ふうん、それがあのゴリラなんだ」

「とても怖いでしょ」

母親は楽しそうに笑ってゴリラを指差しながら我が子に話した。

「ゴリラって」

「そうかな」

しかし男の子はゴリラを見てもこう言うのだった。

「僕そうは思わないけれど」

「えっ!？」

「ゴリラって怖いの？」

そして今度はこんなふうにも言うのである。

「全然そうは見えないじゃない」

「ゴリラが怖くないって」

「一体何を言ってるんだ」

母親だけでなく眼鏡をかけたその側にいる父親らしき男性もこれには驚いた顔になっていた。

「ゴリラが怖くなくて何が怖いんだ」

「そうよね。この子どうしたのかしら」

「だってさ。物凄く優しい目してるよ」

しかしこの子は父親に対しても言うのだった。

「とてもね。そうじゃないの？」

「そう？」

「何処がなんだ」

しかし二人は息子の言葉を全く信じようとしなかった。

「ゴリラの何処か」

「そう見えるんだ」

「見えるよ」

しかしこの子は言葉を変えようとはしないのだった。

「目は優しいしそれに何かしようってのもないし」

「あなた、やっぱりこの子って」

「おかしいのか？」

夫婦は自分の子供の言葉に本気で眉を顰めさせていた。

「ゴリラなのに」

「こんなこと言うなんて」

「また来よう」

そしてこの子は今度はこんなことを言うのだった。

「ゴリラを観にね」

「まあ動物園に来るのはいいけれど」

「それでも」

二人にとっては何と云っていいかわからない事態だった。ゴリラが優しいなどは。それは彼等だけでなく多くの者が思うことだった。

しかしこの動物園では実際にゴリラは安心して飼われていた。係の二人も安心した顔でゴリラのところに来て。そうしてそのうえでいつも餌をやるのだった。

「さっ、ゴロ、ラリ」

「御飯だぞ」

出すのはセロリに林檎やバナナといったものである。どれも野菜や果物ばかりで肉類は一切ない。完全に菜食のものばかりである。

「今日も一杯食べるんだぞ」

「いいな」

係は二人の若い男だった。一人は強い目をして少し鬣を思わせる癖のある茶色の髪である。背は高い。一八〇を超えている。そしてもう一人はまだ幼さの残る顔をしていて口が波型になっている。目は少し垂れていて黒髪を少し伸ばしている。背はもう一方程ではないがやはり結構高いものがある。

その二人がゴリラ達に餌をやっていた。ゴリラ達は静かに二人の側に来て餌を食べる。何か凶暴なところは何一つとしてなかった。

「ねえ剛史さん」

「何だ？」

黒髪の若者がゴリラを見ながらもう一方に声をかけてきた。二人は今そのゴリラのいる舎にいたのだった。

「俺最初はゴリラって怖いって思ってたんですよ」

「顔がそれだからか？」

「ええ、それで」

こうその剛史と呼んだ若者に答えるのだった。

「けれどそれって違うんですね」

「何だ淳」

剛史の方も彼の名前を呼んで言うのだった。

第二章

「御前そんなふう思ったのか」

「だって顔がこんなのですし外見も」

「それ考えたら損な生き物だよな」

「そうですね」

「全くだ」

剛史もまた淳に対して話した。

「こんなに気のいい連中いないのにな」

「ほら、猿の惑星」

古典的名作とされている映画だ。もっともこれは所謂類人猿に対するステレオタイプな一面もある。それはどうも否定できないのは確かである。

「あの映画でもですよね」

「あの映画が一番悪いかもな」

剛史は猿の惑星に対してかなり批判的な顔で述べた。

「あれでゴリラは酷い描かれ方してたよな」

「力づくで暴力的で」

「それでチンパンジーが比較的良識派だった」

実際にはチンパンジーはかなり凶暴だと言われている。動物園等でもその飼育にかなり困るし捕まえることも難しいらしい。凶暴だからだ。

「けれど実際はな」

「ゴリラは力づくじゃないですよ」

実際にゴリラを見て話す二人だった。今彼等は二人の目の前で林檎やセロリを食べている。その姿は至って平和である。

「暴力振るいませんからね」

「ゴリラを捕まえるのなんて簡単なものだ」

剛史はまだゴリラを見ながら話す。

「棒一本あればな」

「それだけで済みますよね」

「済みますよ」

淳もまた言った。

「それだけでね。終わりですよ」

「棒を持って殴る素振りを見せればこいつ等は身を守るだけで反抗もしない」

そうしてそのまま捕まるだけだ。それどころかそのまま殺されてしまうことすらある。ゴリラはあくまで抵抗せずにやられてしまうだけなのだ。

「それだけですからね」

「完全なベジタリアンだぞ、こいつ等」

今度はその野菜を食べるのだった。

「野菜や果物しか食べないのにどうして凶暴なんだ？」

「人間だって菜食主義だと穏やかになりますからね」

「そりゃ例外もいるけれどな」

ヒトラーがそうである。実は彼は菜食主義者でありその料理にラードさえ使わなかった。魚も食べなかったしそれに酒も煙草もやらなかった。しかしやったことは歴史にある通りだ。

「それでも大抵はな」

「ですよ。大人しいですよ」

「そうだよ。全然凶暴じゃないんだよ」

淳も剛史もはつきりと言った。

「こんな優しい動物な」

「他にはいませんよ」

「顔つきや身体つきがこんなものだからな」

確かにいかつい。如何にも凶暴そうである。しかし二人が側にも全く何もしないし大人しいものだ。ただ野菜を丁寧に食べているだけである。

「どうしてもそうなっちまうんだよ」

「ですよ。子供達も怖いっていう子が多いし」

「どうにかならないかな、リアルでな」

剛史はぼやきながらその言葉に英語を入れてきた。

「さもないとこいつ等があんまりにも可哀想だよ」

「何かいい案ありますかね」

飼育係の二人はこんなことを話してぼやいていた。彼等にしても自分達が愛情を持って接しているゴリラ達がそう思われるのが残念で仕方がなかった。そんなある日のことだった。

「またここに来るなんてな」

「だってこの子が」

あの若夫婦だった。やはりあの幼い男の子と一緒に連れて来ている。

「どうしてもっていうから」

「そうだよな。全く何でなんだ？」

父親はぼやきながらゴリラの方を見る。見れば相変わらず後ろ足で長い腕を今にもつかんばかりにしてそのうえでいかめしく歩き回っている。

「こんな如何にも凶暴そうな生き物のところにな」

「そうよね。虎の方がずっといいのに」

「全くだよ」

夫婦はこう言い合って後ろに顔を向ける。後ろには虎の檻がありその中で気高く美しい姿を見せていた。目の光も実に鋭くまるで剣だ。

「何でこんな不恰好なのがいいんだ」

「わからないわよね」

「あつ、ほらお母さん」

しかし男の子はここでそのゴリラ達を指差して笑うのだった。

第三章

「ゴリラ達が餌食べてるよ」

「はいはい、そうね」

「そうだな」

夫婦は我が子の言葉にかなりうんざりとした顔で返す。彼等は本当にゴリラのことはどうでもよかった。どうでもいいどころかうんざりとさえしていた。

「どうするの、あなた。それで」

「どうするって何がだよ」

「このままゴリラのところばかりにいるの？」

怪訝な顔で夫に対して問うのだった。

「虎とかライオンとか。他の場所に行かないの？」

「僕だつて行きたいさ」

これは彼の偽らざる本音であった。

「象とかのところにもね」

「そうよね。けれどこの子は」

またうんざりとした顔で言う。しかしここで二人はお互いの話をしている我が子からはその顔を完全に離してしまっていたのだ。

「そんなの全然ないから」

「参ったな。けれど引き離すわけにもいかないしな」

「そうなのよね。動物が好きなのはいいことだから」

それは彼等もわかっていた。しかしであった。だからといってこれをどうするかがわからないのだった。引き離すのもやはりであった。

「どつしよつかしら」

「困ったな」

そんな話をしている最中に男の子は塀によじ登りそうして。そのうえでさらにゴリラを見ているとだった。何とここで落ちてしまっ

たのだった。

「ちよつと、男の子が！」

「落ちたわよ！」

「えっ!？」

「まさか」

ここで夫婦もはつとした。周りの驚いた声を聞いて。

「男の子がゴリラのところ！」

「落ちたじゃない！」

「ちよつとあなた大輔が！」

「あ、ああ大変だ！」

夫婦は自分の子供が落ちたのを確かめて彼等自身も慌てた声を出す。彼はゴリラのいるその舎の中に落ちてしまったのである。

だが一旦背中を打ったがそれでも平気な顔で立ち上がった。幸い草の上に落ちてそれがクッションになって助かったようである。

「僕は大丈夫だよ」

「そう、よかった」

「まさかと思つたら」

夫婦は自分の子供のその言葉を聞いてまずはほつとした。とりあえず怪我もなく泣きもしていないのを見て安堵の声をあげるのだった。

「けれどあなた」

「そうだよな」

それでも夫婦は暗い顔になって言い合つたのだった。

「それでもゴリラのところに落ちたから」

「このままだと」

「大丈夫だよ」

けれど男の子が舎の方から親に対して言ってきた。それも明るい声で。

「だって僕ゴリラのところにいるんだよ」

「だから危ないのよ」

「何でそれがわからないんだ、本当に」

「だってゴリラだから」

しかし男の子の言葉の色は変わらない。すぐ側にゴリラ達がうるうるしている。皆それを見て冷や冷やとしているがこの子だけは全く平気なのだった。

「平気だって」

「そんなこと違うに決まってるじゃない」

「そうだ、その通りだ」

しかし親達の言葉は変わらない。

「ゴリラって物凄い凶暴なのよ」

「何するかわからないんだぞ」

「大丈夫だよ」

しかし男の子はこう両親に返すのだった。

「だってゴリラだから」

「ゴリラだからじゃないの」

「何を言っているんだ」

親子の間の言葉も考えもかけ離れたものになっていた。

「とにかく。このままじゃ危ないから」

「どうしよう」

「おい、係の人が来たぞ」

「こっちです」

「ゴリラの飼育係の尾花です」

「荒木です」

剛史と淳だった。二人はそれぞれ名乗るのだった。

第四章

「子供が舎の中に落ちたんですか」

「それで怪我は」

「幸いそれはありませんでした」

「怪我は」

両親が二人の前に来て言うのだった。

「けれどこのままじゃ」

「ゴリラに」

「はい、わかっています」

「ですが安心して下さい」

二人はこう両親に告げた。

「我々がすぐに向かいますので」

「ですから」

「頼みますよ、ゴリラですから」

「何かあったら本当に」

この両親はゴリラに対する偏見をあからさまに見せていた。周りもだ。二人はそんな彼等を見て内心非常に辛くいたたまれなかった。

(どうしてなんだ、何故なんだ)

(ゴリラは本当は物凄く賢くて優しいのに)

そう思っただけでも言い出すことはできない。それが余計に辛かった。

そしてその間にも周囲が慌てた声を出す。

(おい、来たぞ!)

「食われるぞ!」

「おい、早く何とかしてくれ!」

皆焦りを露わにして二人に言ってきた。

「このままじゃあの子供が」

「食い殺されるじゃないか!」

(ゴリラは野菜や果物しか食べないのに)

(肉なんか食うものか)

二人はそれはよくわかっていた。

(それでどうしてここまで言われるんだ)

(どうしてなんだ、顔が悪いだけで)

「とにかく。安心して下さい」

「僕達が今行きます」

彼等はそれでも言うのだった。表面上は落ち着いた顔で。

そうしてすぐにロープを出して淳がそれを身体にくくりつける。

そうしてそのうえでゴリラの舎に入っていく。剛史は外に残りそのうえでロープを握っていた。

二人はすぐに男の子を助けようとする。しかしその男の子の側にゴリラ達が近付き。それを見た観客達がまた叫ぶのだった。

「おい、来たぞ！」

「もう駄目だ！」

「あなた、大輔が！」

「食われる！」

両親もまた叫ぶ。最早駄目だと思われた。しかしここでゴリラ達は。

何と男の子を優しくその手に抱いた。そうして彼を優しく抱いたまま舎の中に降りてきていた淳のところに来て。そうして彼に子供を渡したのだった。

「えっ!?!」

「嘘だろ!?!」

皆それを見て驚きの声をあげるのだった。

「ゴリラが子供を!?!」

「子供を助けたなんて」

「しかも飼育係の人に手渡すなんて」

「悪いな、ゴロ」

しかし淳はにこりと笑ってそのゴリラの名前を呼んで子供を受け

取るのだった。

「手伝つてくれたんだな」

「手伝つた!？」

「ゴリラが？」

「そうです」

剛史はここで驚く周りに対して告げた。

「御覧になられた通りですよ。ゴリラが子供を助けたんですよ」

「嘘だろ?ゴリラがそんな」

「子供を助けるなんて」

「いえ、その通りですよ」

だが剛史は驚く彼等に対してまた言うのだった。穏やかな声で。

「ゴリラは人を襲わないですよ」

「そうだったの？」

「凶暴じゃないの」

「ゴリラはどの動物も殺しません」

彼の言葉は続く。

「野菜や果物しか食べませんし」

「そうだったんだ」

「肉とか魚とか食べませんか」

「はい、そうです」

今度は淳が出て来た。男の子を抱いて。ゴリラが助けて手渡してくれたその男の子をだ。

「ほら、実際にこの子を助けてくれましたよね」

「大輔、何ともなかってよかったわ」

「怖くなかったんだな、本当に」

「うん、全然」

男の子は明るい声でにこりと両親に答えるのだった。

「だって。ゴリラはとても優しくて大人しいから」

「坊やはそのことがわかってるんだね」

「ゴリラのことが」

「うん、そうだよ」

男の子は二人に対してもにこやかに笑って答えた。

第五章

「目が優しいし顔だつて」

「顔も!？」

「それは嘘じゃないの？」

「ううん、嘘じゃないの」

けれど男の子は両親の言葉に笑ってその首を横に振るのだった。

「顔つきがそうじゃない。牙も剥いてないし穏やかだし」

「そうなの？」

「そんな。ゴリラが」

「いえ、本当ですよ」

「この子の言う通りですよ」

しかしここで二人が両親に対して話すのだった。

「ですからゴリラはどの動物も殺しませんし」

「暴力を振ることもありません」

「けれど両手で胸を叩いて」

「あんなに威嚇して」

ゴリラといえば誰でも知っている話である。ゴリラはこうして相手を威嚇するのである。確かにゴリラの姿と大きさからこれをさねるとかなりの威圧感がある。

「あれで凶暴じゃないんですか？」

「糞も投げますよね」

「ですからそれだけですよ」

「そういったこと以外何もしませんよ」

彼等はそのことを言われても落ち着いたものだった。

「本当にね」

「威嚇して糞を投げるだけですから」

「そうだったんですか」

「それだけですか」

「はい、それだけです」

「それだけしかできないんですよ、ゴリラは」
二人はまた両親と周りに話すのだった。

「本当にそれだけですから」

「ゴリラは。優しくて大人しいんですよ」

「そうだよ。だから僕ゴリラ好きだよ」

男の子がここでまた言ってきた。

「優しいから」

「それに頭もいいんです」

「この子をちゃんと手に取って助けましたよね」

また話す二人だった。

「力を加減して。そうして」

「御覧になられましたよね」

「はい。今確かに」

「それは」

両親だけでなく他の人達もその言葉に頷いたのだった。

「じゃあゴリラは本当に」

「大人しくて優しいんですね」

「外見じゃ全くわからないですけどね」

淳が微笑んで皆に話した。

「けれど実際はそうなんですよ。ゴリラは大人しくて優しいんです
よ」

「それが本当だったんですね」

「ゴリラは優しい動物だったんですね」

「そして賢い動物です」

今度言ったのは剛史だった。

「ああして力加減もしてくれますし」

「ひょっとしたらチンパンジーとかよりも」

「賢いのかな」

「そうした説もあります」

また言う剛史だった。

「ですから。ゴリラを怖がる必要はありません」

「そうなんだよ。だから僕大好きだよ」

男の子の言葉はここでも出された。

「ゴリラね。これからも大好きでいるよ」

「有り難う」

「坊や、感謝するよ」

淳も剛史も男の子の言葉に微笑んだ。

「わかってくれて」

「ゴリラのことを」

「僕、大人になったらね」

男の子は微笑み続けたまま言う。

「絶対にゴリラの飼育係になるよ」

「そうなの。ゴリラの」

「今のお兄さん達の仕事に」

「うん、絶対なるよ」

両親の問いに顔を向けて答えるのだった。

「なるからね。絶対に」

「そうか。じゃあその時まで待つてるからな」

「この動物園でな」

淳と剛史が男の子の今の言葉に対して頷いた。

「楽しみにしてるよ」

「その時を」

「ゴリラの手つてとても強くて優しいから」

男の子が最初からわかっていることだった。誰も気付いていなかったがこの男の子だけが気付いていた。二人の飼育係を除いて。

「だからそのゴリラ達と一緒にいるよ」

男の子の言葉は続く。

「これから。ずっとね」

この事件からこの動物園のゴリラ達は心優しい賢者として知られ

るようになった。そして男の子は成長しこの動物園で働くようになった。勿論ゴリラの係として。彼は幸せだった。彼が大好きな心優しい賢者達と共にいられて。幸せな一生を過ごすことができたのだ。

優しい賢者

完

2009・5・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8771h/>

優しい賢者

2010年10月8日15時31分発行